

令和3年度厚生労働科学研究費補助金  
(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))

研究課題名(課題番号):強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、  
支援効果の評価方法の開発のための研究(20GC1005)  
分担研究報告書

分担研究課題名:ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会  
実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査(一次調査)

主任研究者:日詰正文(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
分担研究者:安達潤(北海道大学)  
井上雅彦(鳥取大学)  
研究協力者:岡田裕樹(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
内山聡至(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)  
高橋理恵(国立重度知的障害者総合施設のぞみの園)

研究要旨

本研究は、令和2(2020)年度に開発したICF(国際機能分類)、ICT(情報通信技術)を活用した、効果的な利用者情報の把握や記録の収集・分析・共有を行うための強度行動障害PDCAサイクル支援パッケージ(以下、PDCA支援パッケージ)の支援現場での試行と、効果や課題を把握するための調査を行った。具体的には、PDCA支援パッケージのICFを活用した利用者の全体像の把握、ICTを活用した行動の記録と共有、冰山モデルを活用した背景要因の分析、支援手順書の作成と見直し、といったプロセスと、支援パッケージ全体についての評価を調査した。結果として、「ICFを活用することで対象者の全体的な理解が可能となった」、「ICTを活用することで短時間に効率的な記録が可能となった」、「PDCA支援パッケージを活用することで情報の収集と支援者間での共有がしやすくなった」、「PDCAサイクルで支援を行うことで、支援の見直しがしやすくなった」といった効果があり、PDCA支援パッケージが強度行動障害の状態にある者への支援において有効であることが確認できた。

A. 研究目的

1. 背景

先行研究より、強度行動障害の状態にある者への支援において、「目に見えにくい障害特性や強み、環境要因等の包括的な情報収集ができておらず、場当たりの対応計画になっている」、「収集した記録の分析を関係者間で情報共有する仕組みがないために、個々の担当職員の負担感やモチベーションの低下等につながっている」等の課題が指摘されている。そのため、問題となっている行動の背景要因を見つけること、立案した支援計画に基づいて迅速かつ一貫性をもって取り組むことが強度行動障害者支援における課題であり、この2つの課題の解決には、対象者の生活全体を網羅的に把握点検

することと、支援の記録と分析を迅速に行う仕組みのモデルが必要になる。

この課題に対応するため、国立のぞみの園では、令和2(2020)年度の研究において、既存の実践のなかで有用と考えられるICF(国際機能分類)やICT(情報通信技術)を活用し、効果的な利用者情報の把握や記録の収集・分析・共有を行うためのPDCA支援パッケージを開発した。このPDCA支援パッケージを支援現場で活用していくために、効果の検証のための社会実装研究が必要となっていた。

2. 目的

本研究は、PDCA支援パッケージを実際の支援現場で試行するとともに、効果や課題を収集

し、PDCA 支援パッケージの実用化に向けた資料とすることを目的とした。

## B. 研究方法

本研究は、以下の方法により行った。

■調査対象: 強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所 14 カ所 (本研究の研究協力者の所属する事業所および推薦のあった事業所から選定) とした。調査対象事業所の事業種別は、施設入所支援 5 カ所、共同生活援助 3 カ所、生活介護 4 カ所、就労継続支援 B 型 1 カ所、医療機関 (精神科病棟) 1 カ所であった。

### ■調査内容:

#### (1) PDCA 支援パッケージの試行

各事業所で対象となる利用者を選定し、PDCA 支援パッケージを使って情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを繰り返し行った。

本調査では、ICF のツールとして、「ICF 情報把握・共有システム」、ICT のツールとして、「Observations」を使用した。

#### (2) 試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、PDCA 支援パッケージについての評価点 (5 件法) と、効果や課題等の意見収集を行うためのアンケート調査を行った。

調査内容は表 1 の通りである。

表 1 アンケート調査の内容

|   |
|---|
| Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください |
| Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的になったかどうかについて教えてください          |
| Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください   |
| Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください  |
| Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください                  |
| Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください     |
| Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください              |
| Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)         |

■調査期間: 令和 3 (2021) 年 5 月 24 日から 7 月 31 日

(倫理面への配慮)

調査の手続きについては、国立のぞみの園調

査研究倫理審査委員会で承認を得た。

### ■PDCA 支援パッケージについて

・本研究において PDCA 支援パッケージは、以下 (表 2) のプロセスを PDCA サイクルで行うものとした。

表 2 支援パッケージ試行の流れ

|   |
|---|
| ① ICF システムへ記入し全体像の把握  |
| ・ ICF 情報把握・共有システム (以下、ICF システム) の「情報把握シート」に対象となる利用者の情報を記入する。      |
| ・ 「情報把握シート分析アプリ」を使い内容を整理する。                                       |
| ② 利用者の担当者が行動記録表を記入し、課題となる行動を選定                                    |
| ・ Observations Sheet を使用し、対象となる利用者の行動を記録する。                       |
| ③ 利用者の担当者が課題となる行動のベースラインを記録                                       |
| ・ Observations2 を使用し、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録し、行動の傾向を確認する。           |
| ④ 利用者の担当者が冰山モデルシートまたはストラテジーシートの作成                                 |
| ・ 冰山モデルシート等を使用し、課題となっている行動の背景要因を分析する。                             |
| ⑤ 利用者の担当者が支援手順書を作成  |
| ・ ①~④の内容を踏まえて支援手順書を作成する。  |
| ⑥ 利用者の担当者等が支援の実施および行動の記録  |
| ・ Observations2 を使用し、⑤で作成した支援手順書を基に支援を行い、対象となる利用者の行動の頻度や時間帯を記録する。 |
| ⑦ 記録の分析   |
| ・ Observations の分析用ホームページを使用し、記録データの分析を行う。                        |
| ⑧ ICF システムへ記入し、支援前後の全体像の把握  |
| ・ 記録の分析を踏まえて、①で記入した ICF システムを見直し、支援前後の全体像を比較する。必要に応じて加筆修正を行う。     |
| ⑨ 支援手順書の修正  |
| ・ 支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。  |

## C. 研究結果

### 1. 調査結果

調査対象のうち 14 カ所、19 名から回答を得た。質問ごとの回答は以下の通りであった。

Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

評価点 (図 1)

・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は 16 名で、全体の 84.2%であった効果

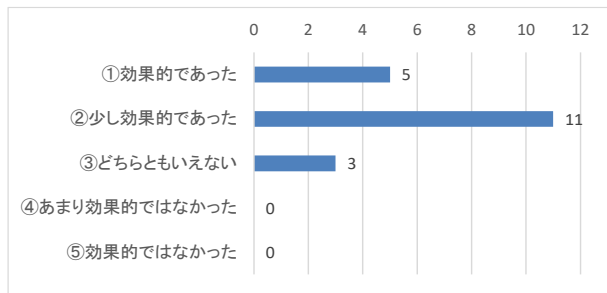


図1 回答結果 (Q1 評価点) (n=19)

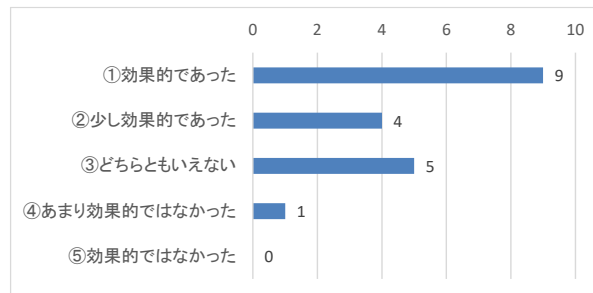


図2 回答結果 (Q2 評価点) (n=19)

- ・利用者の障害特性、強みの把握と整理が行いやすくなった
  - ・ICFによって環境要因も含めた利用者の理解が進み、支援の組み立てがしやすくなった
  - ・ICFによって既に把握していた情報の整理や、行ってきた支援の振り返りができた
- 課題
- ・ICFの設問が利用者の状況・状態に合わないものがあった (表3)

表3 回答結果 (Q1 記述)

| 効果的であった・少し効果的であった  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前の記録に負担感はあるものの、障害特性や強みの把握・整理については行いやすくなった。</li> <li>・事前にICFの視点で整理を行ったことで、記録収集後の支援の組み立てを行う際に広い視点で捉えることができた。</li> <li>・ICFへの記入作業を通じて、本人理解が進んでいる部分とそうでない部分とが明確になった。</li> <li>・ICTのアプリを使用することで、課題となる行動がどの場面で多く見られるのかという傾向をつかむことが出来た。</li> <li>・項目に沿って状況を記載することで、支援が足りていない部分を視覚的に確認することができた。</li> <li>・対象者の障害特性や強みに関しては、既に情報を整理していた。情報の答え合わせや確認として有効であった。</li> <li>・日頃行っているアセスメントに比べ、より様々な視点から障害特性や環境要因について考えることができた。</li> <li>・「強み」が一覧として出るのがよかった。</li> </ul> |
| どちらともいえない  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICFの調査票を利用したが、設問が対象利用者の状況・状態に合わないものもあり、回答に苦慮したため。</li> <li>・明らかにしやすくなったとは感じない。</li> </ul>  |

Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に became かどうかについて教えてください  
評価点 (図2)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は13名で、全体の68.4%であった

- 効果
- ・支援課題が明確となり、焦点が絞りやすくなった
  - ・課題や変化が整理され、具体的な支援計画の作成につながった
- 課題
- ・本人のニーズや意思をしっかりと把握しておく必要がある (表4)

表4 回答結果 (Q2 記述)

| 効果的であった・少し効果的であった  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICFシステムへの入力と、Observationsを使用することで、支援課題の焦点化につながった。</li> <li>・分析し把握した本人の強みや環境設定を組み合わせることで具体的な支援計画を立てることができた。</li> <li>・支援課題が明確となるため、支援の焦点が絞りやすく効果的だった。</li> <li>・支援計画作成時やモニタリング時についても、その都度の課題や変化が明確になるため、かなり具体的な支援計画の作成につながった。</li> <li>・時間、場面、課題行動以前の状況等が整理され、またすぐにスクリーンプロットで傾向を確認できることによって把握がしやすくなり、結果として細やかな支援手順書につながった。</li> <li>・冰山モデルを使用するため、知識や支援方法、様々なパターンを考慮して書く必要があり、最終的には支援員の技量によると感じた。</li> <li>・資料としてはとても細かいため、グラフ等で強み・困りごとがわかるとより個別支援計画に活かしやすかった。</li> </ul> |
| どちらともいえない  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援が足りない部分は確認しやすかったが、支援計画を具体的にたてる段階では、ICFを活用というよりもそれまでのノウハウで培ったもので支援計画を立てたという印象であった。</li> <li>・今回の調査では明確な課題を見つけることができなかった。</li> </ul>   |
| あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援計画の策定プロセスのなかで、本人のニーズ、意思をしっかりと把握した上でこの方法を用いるのはよいが、それがなければ個別支援計画にはつながりにくい。</li> </ul>  |

**Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったがどうかについて教えてください**

評価点 (図3)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった

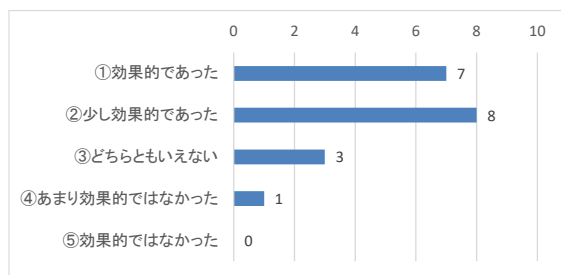


図3 回答結果 (Q3 評価点) (n=19)

**効果**

- ・ICTによって記録が簡素化され短時間で取ることができた
- ・スマホのアプリ (Observations) によって支援をしながらリアルタイムで正確に記録を取ることができた

表5 回答結果 (Q3 記述)

|                        |   |
|------------------------|---|
| 効果的であった・少し効果的であった      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・observationsによって、行動が現れた時にすぐに記録を取ることができた。</li> <li>・タブレット端末やアプリ等を活用することで入力までの時間が簡素化され、記録の収集が行いやすかった。</li> <li>・これまででは、利用者が帰宅後に支援者が現場のことを思い出しながら記録していたことが、リアルタイムで記録できるようになり、より正確な情報が収集しやすくなった。</li> <li>・携帯端末で、本人支援をしながらシンプルに記録が取れる点がとてもよかった。</li> <li>・ICFによる分類項目が詳細なため、あらためて本人情報の整理につながった。</li> <li>・他職種との連携の際に同一の指標を記入することで、多角的に利用者に関する支援状況をまとめることができた。</li> <li>・毎日入力することで利用者の情報がデータ化されて確認できるところが良かった。</li> </ul> |
| どちらともいえない              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報を更新することで進捗と変化が把握でき、その都度の入力の手間も減るため、毎年積み重ねていくことに関して実用的である。</li> <li>・明らかにしやすくなったとは感じない。</li> </ul>   |
| あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ソフトの使用方法についての理解が十分ではなく、使用の際に手間がかかる面があった。</li> </ul>   |

**課題**

- ・ICTの使用についての理解が十分でなく手間がかかった (表5)

**Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください**

評価点 (図4)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は12名で、全体の63.2%であった

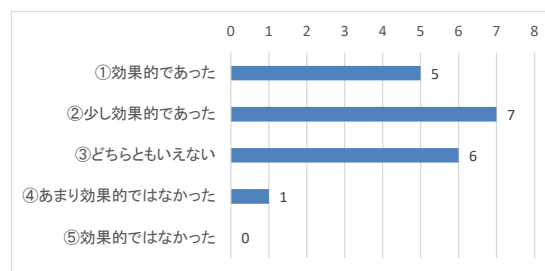


図4 回答結果 (Q4 評価点) (n=19)

**効果**

- ・ICFによる情報やICTによる記録によって情報が視覚的にわかりやすく確認できるため、支援者間で共有がしやすくなった
- ・利用者の行動が記録によって整理された

表6 回答結果 (Q4 記述)

|                        |   |
|------------------------|---|
| 効果的であった・少し効果的であった      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTを用いることで、利用者の行動の特徴を確認しやすくなった。</li> <li>・関係者間で情報を共有する際、視覚的にわかりやすくなった。</li> <li>・目に見える形で利用者の行動を確認しやすくなった。</li> <li>・まとめ、分析をしたものを視覚的にわかりやすく確認できるため、支援者間で共有がしやすくなった。(今までは担当職員の力量にかかっていた。)</li> <li>・行動が記録で整理されたことによって支援の優先順位がつけられた。</li> <li>・「この時間帯に課題行動が多い」など、データを見ながら支援者間で共有ができた。</li> <li>・ICF全体の情報を共有するには項目の量が多く、すべてを見て把握している支援者は少なかったと感じた。</li> </ul> |
| どちらともいえない              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の調査で支援者間の情報共有までいかなかった。</li> <li>・家庭や日中の通所先との間で、本人の行動観察に対するアプローチや考え方に相違がある場合には、同じツールを使用して課題行動の回数を記録するのは難しいのではないかと感じた。</li> </ul>   |
| あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった | <ul style="list-style-type: none"> <li>・外部関係者と情報共有することがなく、情報共有ツールとしての効果ははっきりと確認できなかった。</li> </ul>   |

め、支援の優先順位がつけやすくなった  
課題

- ・ 家族や他機関と行動観察に対するアプローチや考え方に違いがある場合は、同じツールで記録を取ることが難しい（表6）

**Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください**

評価点（図5）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

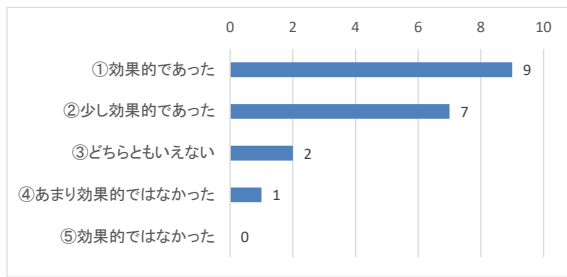


図5 回答結果（Q5 評価点） (n=19)

効果

- ・ スマホのアプリ（Observations）の入力が簡

**表7 回答結果（Q5 記述）**

|  |
|--|
| <b>効果的であった・少し効果的であった</b>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アプリで気軽に記録を取れることはとてもよかった。</li> <li>・ 打ち込み方法が簡単であり、すぐにスクリーンショットで提示されるため、記録の軽減につながった。</li> <li>・ 短時間で記録できるため、記録の漏れが少なくなった。</li> <li>・ ICT を用いることで行動の特徴を把握しやすくなり、記録を取ることの負担感が減った。</li> <li>・ アプリの入力はとても簡便で、自動でグラフ化してくれるため情報共有しやすかった。</li> <li>・ 何を記録すれば良いかがわかりやすく書き込みしやすい。ただ、記録時に違う支援者が異なる表記で記録してしまい何度か書き直ししてしまうことがあった。</li> <li>・ 支援中に携帯を操作することが難しく感じた。</li> <li>・ 手元にあることで正確な回数や時間の記録が取れる一方で、実際に支援をしながら記録を取るのが難しい入浴場面などでは、従来通り支援を終えてからの記録になることが多かった。</li> </ul> |
| <b>どちらともいえない</b>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ソフト自体の利用が初めてであったことやスマホを現場で使うことでの利用者への影響もあり、その場での打ち込みが難しい状況があった。</li> </ul>  |
| <b>あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった</b>  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ デバイスを持っていないと記録できないので、複数人で支援する際は手間がかかる。</li> <li>・ 複数のデバイスを持っていても、クラウド化されていないので意味がほとんどない。</li> </ul>   |

単で短時間でできるため、記録の負担の軽減  
につながった

課題

- ・ 支援中に記録を入力することが難しい場合がある（表7）

**Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください**

評価点（図6）

- ・ 「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった

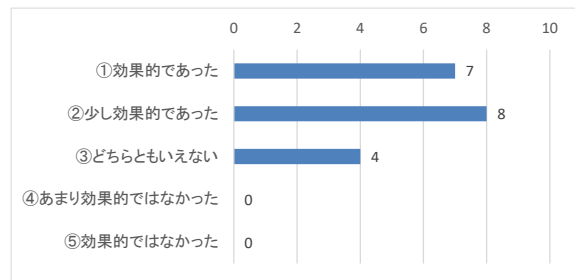


図6 回答結果（Q6 評価点） (n=19)

効果

- ・ 情報が整理されるため課題を絞りやすく、支援の計画を立てやすくなった
- ・ 記録がグラフ化されて視覚的にわかりやすくなるため記録の分析がしやすくなった

課題

- ・ 記録は効率的に取ることができたが、分析は支援者のスキルが求められる（表8）

**表8 回答結果（Q6 記述）**

|  |
|--|
| <b>効果的であった・少し効果的であった</b>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題である行動やその時間帯など絞り込みやすく、情報の分析がしやすくなった。</li> <li>・ すぐに表に結果として転換されるため、分析する時間までが短時間であった。</li> <li>・ スクリーンショットですぐに確認できるため、把握しやすく、支援者間でブレが少なかった。</li> <li>・ 利用者情報の打ち込みは大変だが、情報が整理されているので支援を計画する際には効果的だと感じた。</li> <li>・ 集計は、手早く行えるようになったが、記録の分析、潜在的な部分については、まだまだ担当職員の力量にかかっているように感じた。</li> </ul> |
| <b>どちらともいえない</b>   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 記録に基づいた分析の行程まで進めることができなかったため、評価は難しい。</li> </ul>   |



## Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点 (図7)

- ・「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

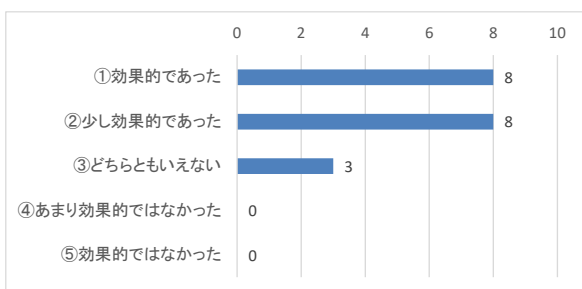


図7 回答結果 (Q7 評価点) (n=19)

### 効果

- ・ ICF、ICT を活用することで情報の収集と共有がしやすくなり、課題が見えやすくなった
- ・ 短時間で効率的に記録を取ることができ、負担の軽減につながった
- ・ PDCA サイクルを行うことで支援の見直しが可能となり、支援者間で更新をしていくこと

表9 回答結果 (Q7 記述)

| 効果的であった・少し効果的であった  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今後パッケージを活用することで、短時間で記録を取ることができ、また目に見える結果を踏まえて、再評価、実施とスピーディーに進むことが期待できる。</li> <li>・ ICF、ABA、冰山モデルと多角的な視点で利用者情報を把握することで、利用者本人の困りごとや心配ごとをサポートできる。</li> <li>・ ICF や ICT を使用することで、情報の共有がしやすく見える化が図れた。</li> <li>・ 「本人の情報整理→観察と記録→手順書の作成と支援→支援の振り返り」という一連のサイクルに集中的に取り組むことで、本人の理解を固定させずに常に更新していく必要性を実感することができた。</li> <li>・ 新規利用者の入所時や、利用者本人の環境が大きく変化したタイミングなどでは必ず役に立つシステムである。</li> <li>・ システムに不慣れであったため、新規課題の取り組みに対しての労力が大きかった。ただ、システム自体は使いやすく、慣れてしまえば一定の効果が得られると感じた。</li> <li>・ 全体的には効果的である。ただ、ICF シートへの記入量の多きは負担になるように感じられた。</li> <li>・ ICF シートへの入力を標準化していくためには、解釈も含めてもう少し平易な言葉で、また指標等も明確である必要がある。</li> </ul> |
| どちらともいえない  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ICT という意味では、クラウド化されて初めて達成できると感じた。</li> <li>・ 記録は当事業所で使用している紙ベースの生活記録表の方が現時点では使いやすい。</li> </ul>  |

の必要性を確認することができた  
課題

- ・ ICF は効果的であるが、情報を入力する上で労力がかかる
- ・ ICT に不慣れであることや、Observations のクラウド化や操作に関する課題がある (表9)

## Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

### ICF について

- ・ ICF 情報把握シートの記載は項目が多く、また現在の生活を見ているだけでは記載できない箇所も多々見られた
- ・ 教育・医療・福祉の連携が重要になってくるが、利用者本人が生活場所を移行する際の資料の一つとして ICF シートのデータを活用することで、受ける事業所側の初期負担の軽減につながるとともに、本人への支援がスムーズに行われるのではないかと
- ・ ICF は幼少期から記録がつながり続けることで、より適切な分析ができるのではないかと

### ICT (Observations) について

- ・ Observations Sheet に関して、分析 HP を開かないと記録の一覧が見られないことは少し負担感があり、アプリからも直接一覧が見られることが望ましい
- ・ 行動記録の入力方法 (書き方・表現) について例示があると入力方法が統一でき分析しやすくなるように感じた
- ・ Observations は、記録の合理化や共有・分析で利用できる可能性は感じたが、使い方の周知、それぞれの現場での使い方には工夫が必要と思われた
- ・ クラウド上でデータが保存、共有できれば便利である
- ・ 将来的には冰山モデルや支援の手順書作成と連動して落とし込めるようにできればよい

### パッケージについて

- ・ 冰山モデルシートも記入用紙だけではなく、記入することで支援方法の提案や関連性が考えられる項目の候補が出てくるツールやアプリになれば、支援者による技量や考え方によ

る差は少なくなると感じた

- ・ ICF システムの記入完了までと、冰山モデルシート作成後に支援手順書を作成の期間がかなりタイトで、支援会議等の時間をしっかりとって考えることができなかった
- ・ 課題となる行動の選定とリストアップにより、本人の行動観察がより明確になる一方で、回数や頻度に現れてこない課題に関しては、支援者側の関わりや環境について平時の記録も併せて残しておく必要性を感じた
- ・ 家庭での様子の記録、違いを分析できたらよいと感じた
- ・ 冰山モデルの記載が、今回のツールとの連動をあまり感じ取れない

## 2. PDCA 支援パッケージの実践事例

本研究において、試行した事業所で PDCA 支援パッケージを実践した事例を紹介する。

### (1) 対象者の概要

対象者：A 氏

性別：女性

障害特性：

- ・ 重度の知的障害、自閉スペクトラム症。
- ・ 絵カードや写真、文字(数字)の理解があり、支援に活用している。
- ・ コミュニケーションは一方的であり、独特の話し言葉で表出している。
- ・ 環境の変化や見知らぬ人からの介入等、見通しの持てない状況が苦手である。
- ・ 興味の幅が狭く、特定の物事に強く固執し、活動へ参加できないことがある。
- ・ 手先が器用で、細かな作業、活動を好む。

行動の特徴：

- ・ 日常的に気分の急変があり、突発的に興奮状態となる。
- ・ 興奮状態になると他傷行為(主につかみかかり、髪引き・噛みつき・頭突き・足蹴り)に至る。
- ・ また他傷行為以外にも物壊し・絶叫・号泣などや、自傷行為(主に自ら後方へひっくり返り後頭部を床へ打ち付ける・壁や扉へ頭突き・腕を噛む)がみられる。
- ・ 生活のいたるところで物事への激しいこだわりがある。様々な物事へこだわり、一度こ

だわると気が済むまで続く。(バンドエイド、ティッシュ、紙切り等)

(2) PDCA 支援パッケージを使用した実践の流れ

#### ① ICF システムへの記入

##### 【準備】

具体的なエピソードを把握するために、ベテラン職員及び利用者の特性をよく理解している職員へ、聴き取りを行った。

#### ② 行動記録表の記入

Observations Sheet を使用し、「他傷行為」をターゲットに 1 週間記録を取った。

##### 【準備】

- ・ アプリ操作のマニュアルを作成した。
- ・ 紙媒体でのメモを用意した(長文での記録を行うため)。
- ・ 日毎に担当者を決め、端末を所持した。

#### ③ 行動のベースラインの記録

Observations2 を使用し、行動の記録を取った(図8)。

##### 【準備】

- ・ アプリの操作マニュアルを作成した。
- ・ 複数職員が記録を取るため、端末の置き場所を固定し、活動時は付き添い職員が所持した。

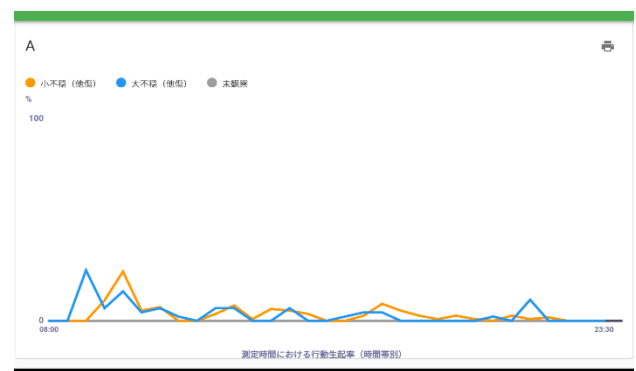


図8 行動の時間帯別頻度 (Observations2 による記録)

#### ④ 冰山モデルの作成

事業所で既に作成していた冰山モデルに、①～③で把握した情報から分析した背景要因等を加筆した(図9)。

加筆した内容

(本人の特性)

- ・ 生活リズムが崩れやすい

- ・慣れ親しんだ人以外との関わりがストレスになる
- ・緊張や不快を訴えることが苦手
- ・他者の気持ちを理解することが苦手
- ・非言語を理解することが苦手
- ・場面に合わせて行動することが苦手
- ・手先を使う細かな活動が得意  
(環境・状況)
- ・慣れ親しんだ人がいつもいるとは限らない
- ・初対面の人や外部の人の出入りがある
- ・場面の状況が理解しにくい環境

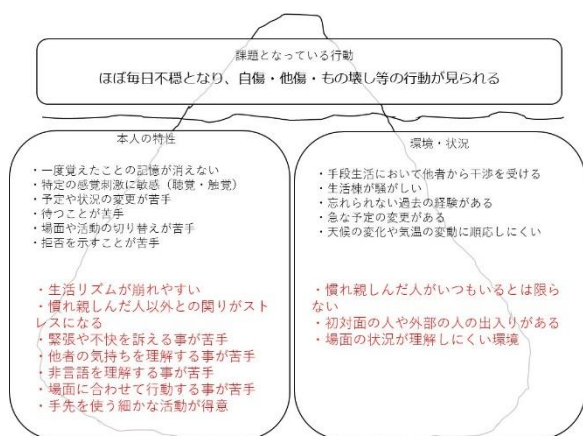


図9 氷山モデル

### ⑤支援手順書の作成

- ・③の記録から、起床直後に不穏な様子になることがわかった。
- ・対応として、手先の器用さ、集中力の高さといった強みがあることから、朝食のサイドメニューを選び、自身で簡単な調理を行ってもらうプランを立てた。

### ⑥行動の記録

Observations2 を使用し、⑤で作成した支援手順書を基に支援を行い、行動を記録した。

### ⑦分析用 HP

Observations 分析 HP にアップデートし記録の分析を行った。

### ⑧支援前後の全体像の把握

行動の記録等を踏まえて ICF システムを見直した。

### ⑨支援手順書の修正

以下の点を修正した。

- ・サイドメニューの調理、喫食は楽しんで行っている一方、喫食後に食器を投げる行為が続いたため、食器を本人が選んで購入したものに変更した。
- ・PECS (絵カード) を使用し、食器や調味料を自身に選んでもらった。
- ・結果として、食器を投げる行為が減少した。また、自身も割れてほしくないため、床に軽く置く行動に変化していった。

### (3) PDCA 支援パッケージの効果と課題

ICF (ICF システム) について

#### 【効果】

- ・ICF システムに落とし込んでいくことで、より具体的に細かく分析することができ、特性把握につながった。
- ・Excel も入力しやすく、一度入力が完了した後も修正・加筆がしやすかった。
- ・カテゴリ別 (強み、支援の維持・調整、支援の修正など) に分かれることで、支援者以外の人が見ても、特性の把握がしやすいのではないかと感じた。

#### 【課題】

- ・量が多いため記入の時間を要する。
- ・職員によって対象者の見立てに違いがあるため、記入者によって内容に変化があるかもしれない。

ICT (Observations) について

#### 【効果】

- ・過去の記録を振り返りやすかった。
- ・過去の記録がタブ付けされるため、入力が省略できた。
- ・行動の機能をチェックすることで、アプリ内で機能分析をされるため手間が省略された。
- ・入力方法がシンプルで分かりやすく、記録から分析までの負担が軽減された。
- ・入力ごとに、アプリ上で生起頻度の高い時間帯のグラフが更新されていくため、一目で把握することができた。
- ・対象利用者の全体像をより詳細に把握できるツールであり、システムを入力することで利用者のことを深く考える機会となった。



- ・ 行動障害のみの近視眼的な視点ではなく、利用者の幅広い環境や経験に目を向け、生活の質を評価する気づきとなった。
- ・ 関係機関との情報共有の際の共通言語として活用できる可能性を感じた。

#### 【課題】

- ・ 端末操作の苦手な職員にとっては入力にかえて時間がかかった。
- ・ 現場で入力できずに、紙媒体にメモを取って後から入力するといったことがあった。
- ・ 一端末につき一アプリのため、別端末でのログインができず、当該端末を持っていないと記録が行えない状況であった。
- ・ 記録分析の労力が軽減され、ICTの活用は支援現場では欠かせないものであると実感した。
- ・ 支援者がICTを活用する習慣を身に付けるとともに、支援者全員が扱えるシンプルさも重要だと感じた。

#### D. 考察

試行調査の結果、PDCA 支援パッケージの評価として、

- ・ ICF を活用することで対象者の障害特性や環境要因を含めた全体的な理解が可能となった。
- ・ ICT を活用することで短時間に効率的な記録が可能となり、支援者の負担の軽減につながった。
- ・ PDCA 支援パッケージを活用することで情報の収集と支援者間での共有がしやすくなった。
- ・ PDCA サイクルで支援を行うことで、支援の見直しがしやすくなった。

等の効果があった。また、実践事例では、PDCA 支援パッケージを活用することで、対象者本人の特性や背景要因の把握が進み、新たな支援手順書によって物を投げる行為の減少につながることができていた。

これらの結果より、強度行動障害の状態にある者への支援において課題となっている「目に見えにくい障害特性や強み、環境要因等の包括

的な情報収集」や「収集した記録の分析と関係者間での情報共有」などについて改善が期待できるツールとして、支援パッケージが有用であることが確認できた。

一方で、「ICF で情報を入力する上で労力が必要」、「ICT の環境整備が不十分なことや操作が不慣れなこと」、「背景要因を捉える上では支援者のスキルが必要」といった課題が確認でき、さらなる PDCA 支援パッケージの改善と試行が必要である。

#### E. 結論

本研究により、強度行動障害の状態にある者の支援において、PDCA 支援パッケージが有効であることが確認できた。一方で、試行調査の対象は限定的であり、PDCA また支援パッケージに関する課題も明らかになったことから、さらなる社会的な実装研究が重要である。

#### 【文献】

- 1) 佐々木茜、日詰正文、村岡美幸：強度行動障害者の研修カリキュラム及び研修運営に関する実態調査 国立のぞみの園研究部紀要, 12 : p39-63 (2019).
- 2) 2019 年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害児者に携わる者に対する体系的な支援スキルの向上及びスーパーバイズ等に関する研究」報告書 一般社団法人全日本自閉症支援者協会, (2020).
- 3) 日詰正文、岡田裕樹、内山聡至ほか：強度行動障害者支援のための ICF、ICT を活用した PDCA サイクルの運用マニュアル案作成のための研究 令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金報告書 (2021).
- 4) 安達潤：ICF の視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発—知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて— 発達障害研究 40 (4) : 336-351 (2018).

- 5) 井上雅彦, 中谷啓太, 東野正幸: 行動上の問題に対する行動記録アプリケーション“Observations”の開発 行動分析学研究, 34 (1): 78-86 (2019).

#### G. 研究発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし